

二〇二〇年の東京五輪に向けて何か生きたいでいるのではないか。そうとしか思えないのは、ここ数年、東京で近代建築の取り壊しが相継いでいるからだ。記憶に新しいのは、この連載でも取り上げた国立競技場（一九五八年）やホテルオークラ（一九六二年）である。いずれも一九六四年東京オリンピックを前に建設され、戦後復興の記憶を刻んだ記念碑的な建物だった。他にも、東京會館（一九七一年）や日本興業銀行本店（一九七四年）が半世紀を待たずに姿を消し、ソニービル（一九六六年）も近く取り壊しが始まる。ある意味で戦後モダニズム建築の絶頂期に建てられた名作ばかりが次々に失われているのである。なぜ東京は上手に年を重ねることができないのだろう。そんな中、さらに長い歴史を積み重ねてきた渋谷区神宮前にあるJR山手線の原宿駅の存続が危ぶまれている。

二〇一六年六月、JR東日本は、原宿駅に新たな駅舎を建設する改良工事の計画を発表した。これは、二〇二〇年の東京五輪を見据えたバリアフリー化と駅の利便性向上が目的だという。新しい駅舎は、線路とホーム上に鉄骨造二層で整備し、延床面積約一七〇〇㎡の規模になる。一日約七万四千人の乗降客があり、混雑緩和を図るために、線路西側の明治神宮側にも出入口を新設し、地下通路によって竹下通りへ続く竹下口改札への接続も計画されている。また、既存駅舎を使いながら列車の運行を妨げずに工事を行うため、工期は約五年に及び、全体の完成は二〇二一年度になるという。すでに二〇一七年一月に工事は着工している。しかし、不思議なことに、発表された完成予想図や計画図には、既存の木造駅舎は描かれていない。また、新聞報道によれば、

JR東日本の社長は、「現在の原宿駅の機能は全面的に新しい駅舎に移行する」との方針を明示したという。このことは何を意味するのだろうか。それは旧駅舎の取り壊しを前提とした計画なのではないのか。こうした不安から、東京都内に現存する最も古い大正期の木造駅舎の行方に注目が集まり、少しずつ議論が広がっている。そこで、遅ればせながら、現状を見ておきたいと思いい、二〇一七年三月初旬、現地に立ち寄った。よく知られているように、原宿駅は、西

記憶の建築

松隈 洋

原宿駅 1924年
都内最古の木造駅舎の行方



南側の表参道から見る駅舎遠景



明治神宮の柱を背にした東側入口

表する風景が広がる。そんな風景に長く溶け込んできたのが、一九二四年六月に完成した現在の駅舎である。訪れると、明治神宮の緑を背に、ハーフトインバー様式の木造軸組がそのまま外壁に表われたヨーロッパの田舎町にありそうな駅舎が健在で、外国人旅行者の混じる多くの人々が行き交う。資料などからその歩みを振り返ると、いかにこの建物が歴史を刻んできたかが見えてくる。駅の名前の由来となった原宿とい

側に明治神宮の鬱蒼とした柱と代々木公園の芝生の緑が広がり、東側には青山通りに向かって櫛並木の美しい約一・一キロの表参道が続く要所に位置する。また、対面には、一九六四年の東京五輪のメイン施設として建設された丹下健三の国立屋内総合競技場、通称・代々木オリンピックプールが今も威容を誇る。一方で、北側には若者文化の発信地として知られる竹下通りがあるなど、都市的スケールから人間的な路地まで、さまざまな表情の空間が集積し、東京を代

う地名は、一九六五年の新住居表示のために姿を消したが、もともとは鎌倉街道沿いの宿場町であった原宿村に始まる。時は過ぎ明治期に入ると、日清・日露戦争を背景に一九〇九年に代々木練兵場が開設され、それまでの農業や水車業が衰退する。かわって、この地は、明治神宮の造営という国家的事業により近代化が進んでいく。一九一五年に着工し、五年の歳月をかけて一九二〇年に完成し、併せて表参道も竣工する。そして、一九二三年の関東大震災の

翌年に竣工したのが、今の木造駅舎である。続く一九二六年からは表参道に震災復興の同潤会アパートの建設が始まり、翌年には瀟洒な鉄筋コンクリート造の集合住宅が表参道にハイカラな街並みを誕生させる。しかし、平和な日々はそう長くは続かず、戦争へと突入し、一九四五年四月十四日にはアメリカ空軍の焼夷弾攻撃により、明治神宮は炎上、周囲の木造家屋もほとんどが焼失する。だが、原宿駅は、約一〇発の直撃弾を受けたものの、不発だったため奇跡的に無事だった。後の一九七五年八月の記者会見の際、皇太子（現在の天皇）が、敗戦直後の原宿についての感想として、「疎開先の日光から帰って、一望焼け跡の中に原宿駅がポツンと残っていた」と強い印象を語ったという（『原宿駅のしおり』日本国有鉄道東京西局原宿駅発行一九七六年）。

敗戦後は、代々木練兵場が進駐軍に接收され、士官クラスの宿舎が建設されてワシントンハイツへと様変わりしたことを契機に、原宿は米軍の街として発展し、アメリカ文化が育っていく。さらに日本が占領から独立した後は、ワシントンハイツは代々木公園として整備され、一九六四年の東京オリンピック開催も弾みとなって、アメリカ文化の香りのするお洒落な街としてのイメージが定着して、今日へと至るのである。原宿駅舎は、旧・国鉄時代に「原型保存指定建物」に指定されていた。激動の時代を目撃し、人々と共に歩んだからこそ、愛されてきた歴史がそうさせたに違いない。生きて使われる現役の駅舎として整備が進むことを願わずにはいられない。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工学）。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。